

感想

動画を視聴しているときは、チンパンジーについての知識がほぼゼロに近く、終わりに近づくにつれて謎が謎を生み普通のチンパンジーについての知識を身に付けてから実習に参加すべきだったと反省しました。しかし、視聴を終えてから感想を述べて話し合っていく中で少しずつ知識を得ることが出来ました。体調が好ましくないときは毛並みがあること、人間とは死のとりえ方が異なること、子供が乳を吸わなくなったら発情が始まること、発情期はおしりが膨らむこと、チンパンジー同士でのじゃれ合いはかなり激しいこと、枯れ木などで音をだしてオスは自分の権威を示すこと、マハレでは薬草利用を行っていること、アロマザリングについてなどきりがなくらいです。この実習を通してかなりチンパンジーについて興味が湧きました。これは他の動物よりも人間に近い動物であることが動画を見て改めて感じられたからだと思います。具体的に、おでこに手を持っていき熱を測るようなしぐさをしたり、元気のないときに三角座りをしたりした行動です。動画を視聴しているときは、チンパンジーが遺体運びをすることは習慣化されているのか否かについて考えていましたが、学部生の方の説明で大変珍しいことを理解しました。そこからまた疑問が出てきて、はるか昔はチンパンジーの中で遺体運びが主流であったのかそれとも未来への先駆けなのか気になります。また、ナがジョクロを何度も木の上から落としたのは本当に遊んでいたからなのか、テュアがジョクロを用いていたのは権威を表しているからなのかも気になります。そして、解決しなかったジレがジョクロを仰向けに背負った行動の訳や死ぬ間際にジョクロの年齢では行うことが滅多にない長い毛づくろいの訳、そもそも死体運びを行った訳も今後解明されてほしいと思いました。大人数で感想を述べあったりしたことがなかったのです。前はとても緊張しましたがたくさんの異なった意見を聞くことは楽しいことだと知りました。発見ばかりの自習で学ぶことが非常に多かったです。またこのような機会をもちたいと思います。

ジョクロの動画を観て

今回、ジョクロが亡くなる前と後の群れの反応を観て、最も驚いたことは、母親のジレが、亡き娘の遺体をいつまでも離さずに持っていたことだ。自分の中では、動物は、群れのメンバーが亡くなったら、食べるか、そのまま放置するのではないかというイメージがあった。確かに、以前、ワオキツネザルの番組を観たときにも、亡くなった我が子を天敵にとられ、母やきょうだいが必死に奪い返そうとしていたシーンがあったので、実習が終わって改めて考えてみると、このようなことは普通のことなのかもしれないと思った。しかし、これらの他に例を知らないの、他の動物についても調べてみたい。また、オスのナが、亡くなったジョクロを振り回したり、落としたりしているところが衝撃的だった。激しい遊びをするとはいえ、こどものチンパンジーが、普段からそのような遊び方をするのだとしたら、その場面を見た母親はどのような反応をするのか不思議に思った。このことに関連して、周りが死体を遊び道具として使ったり、木の棒代わりのように使っているが、その個体の目には、死んでいるジョクロは（死んでいる、死んでいないではなく）、どのような存在として映っていたのか気になった。私は、母親ジレの持ち物として、道具であるとしか認識していないのではないかと思う。ナレーションでは、テュアが、木の棒を使うときよりも丁寧に扱っている、とかと言っていたが、生前のジョクロの額にジレが自分の額を当てて、体温を測っているかのような動作と同じで、たまたまである可能性もあるのではないかと思う。根拠はないが、ジレ自身も、初めのうちは死んだ我が子であると認識していて肌身離さず持ち歩いてしたが、そのうち、なぜ持っているのかも忘れて、新しいこどもを産む準備にはいるのではないかと考えた。

自分の感想だけではなく、他の高校生の感想を聞いたり、それに対する学部生の方の意見を聞いたりして、自分にはない、新しい切り口の面白い考え方を取り入れることができ良かった。特に、人間には死んだ人を見て、自分もいつかはそのような運命になると想像するから死を恐れる、しかし、チンパンジーには未来を想像する力があまり備わっていないため、死を怖がることはなく、ジョクロが死んでいても逃げたり避けたりしないのではないか、という考えが興味深かった。ゴリラでもネコでも死ぬ前は毛並みが荒れる、ということが話題に上がっていたが、なぜそのようなになるのか詳しく知りたい。また、ジョクロが死んでからもジレが丁寧に毛繕いしていたのは母の愛なのかと思い、感動していたが、愛であると断定するのは難しいと聞き、少しショックだった。

5/10 感想

ジョクロの生死に関するビデオを見て、改めて自然界の厳しさを感じました。人間には病院があり、薬があります。対して野生の動物達にはそれがなく、単なる風邪ですら命を落としてしまうという過酷な環境に生きているのだと。

話題となったジレがジョクロを運び、ジョクロについた虫を食料にしている説は個人的には違うのではないかと思います。話に上がっていたことですが、そこまでして食料を確保したいなら自分の周りのハエを追い払うことと矛盾するからです。もしハエも食べているのだとしたらかなり信憑性が高いと思います。

最後に新しく疑問に思ったことです。

ジョクロが風邪を引いたとき周りには多くの群れがいました。しかしそのうちのどの個体もその風邪が感染しなかった、または発症しなかったのは何故でしょう。そもそも免疫があるのか感染しにくい体質なのか…という点が気になりました。

ジョクロの死のビデオをみて

ジョクロが死ぬ前は食べ物を食べなくなり、ほとんど動かずしんどそうだったのに長く毛づくろいを長くしたりと子供ながらできることをしていたのかなと思うと悲しくなりました。毛並みが荒れていて、顔つきも弱いと聞いてもう一度ビデオをみたら確かに他の個体とは違うなと思いました。風邪を引くだけで死んでしまったけど、薬用植物を利用している動物もいると聞いて驚きました。でも群れの違いや地域差があるのかなと思いました。ジョクロの死で、ジレがジョクロの世話をしているのを真似したのかジャが木を人形に見立てて遊んだり、ナがジョクロの死体で遊んでいたりと、他の個体に影響を与えているなと思いました。チンパンジーの成長について調べたら0~4歳の時は移動時は母親に運搬され、社会的な付き合いはほとんど母親のみに限定され、5~8歳の時は他の子供と頻りに遊ぶようになり、9~13歳の時のメスは他の集団に移籍するそうです。ジョクロは2歳半だったので社会的な付き合いはほとんど母親のみならずなのにナがジョクロの死体で遊んだり、第1の男性テュアがジョクロを引きずっていたりと他の個体がジョクロを触ることができていて、それはやっぱり死んでいるからこそなのかなと思いました。今回みたビデオは1992年のジレが死んだジョクロを持ち運んだものだったけど、2003年にもジレとブアブアという母親がジマトとベベという死んだ子供を運び続けたと書かれているものを見つけて、この行動はがボツソウの群れの中では稀なものではなく観察学習で受け継がれる可能性があるそうです。ビデオの中でも誰も匂いを嫌がったりしていなかったから運び続けられたのかなと思いました。普通は死んでしまうと置いていかれて腐敗して終わるけど、ジョクロはミイラ化して原型が保たれていました。ミイラ化した理由は母親が死体を持ち続けたため土の上に放置された場合と違い細菌等の繁殖の機会が減ったから、母親がこまめにハエや虫を追い払ったから、季節が乾季だったからの3つが考えられるそうです。また母親が遺体を運ぶのをやめたのは生理的なものが関係しているらしく、子供が死んだことで授乳が止まり生理周期が再開して繁殖可能な状態になり、前の子供を運ぶのを辞めるという生理的・心理的なメカニズムが働いているとあったけど、にしても長い間運んでいたなと思いました。それぞれの感想を聞いて、ウジを食料として見ているから死体を運んでいたという考え方について話していたことが面白かったです。ダニ、ノミ、シラミは食べるけど重要なタンパクではなく、子供を背負って労力を使ってまでウジを育てようとはしないのではないかという考えもあってどっちも納得できました。チンパンジーは死に対して動かないという事実は知っているけどヒトのように死後のことは考えないことや子供と大人、怪我と病気では受け入れ方が違うのではないかと聞いて、私はそこまで考えられなかったのもそういう考え方もあるのだなと思いました。ジレがジョクロの額に手を当てる行動はたまたまだったかもしれないように他のものもそうかもしれないけど母親と群れの行動についてたくさんの考えが聞けて発見が多かったです。まだまだ知識が少ないので増やして行けるように

したいです。

出典

<http://jinrui.zool.kyoto-u.ac.jp/ChimpHome/seicho.html>

https://www.jstage.jst.go.jp/article/psj/20/1/20_1_45/_pdf

<http://langint.pri.kyoto-u.ac.jp/ai/ja/publication/DoraBiro/Biro2010.html>

5/10 zoom meeting の感想

私がビデオの内容について学部生や他の高校生とディスカッションをして思ったことは、人の目線から見るのと対象の動物の目線に立って見るのでは捉え方が変わってくるということです。例えば、今回のビデオだとチンパンジーがおでこに手を当てる行為をしたときに、人の目線で見ると熱を測ったように見えるけど、実際はその行為を一回しかしていないことからチンパンジーの目線に立つと熱を測っているとは見えにくいことが分かります。どちらが正しいと一概にいうことはできないけど、二つの目線で見ることによって分かることもたくさんあるのではないかなと思いました。

また、私が学部生の話聞いて気になったことは、母親のジレがジョクロが死んでいることを理解しているような行動をしている反面、ジョクロを運ぶことをやめないことです。この行動がこの群れでしか行われていないということもおっしゃっていたので、ジレはジョクロが死んだということを認められなくて運んでいるのか、この群れの文化として他の個体の行動を見て真似しているのか、またはもっと別の意味があるのかによって、チンパンジーの死に対する捉え方が変わってくるし、どれが正しいのかを判断することが難しいことから、より正確なことを知るにはいくつもの事例を見て吟味していくことが必要だと感じました。さらに、このビデオでは観察できていなかったような巣での様子なども観察できていたらもっと違う見方をできていたのかもしれないと思いました。

チンパンジーでは遺体を運ぶのは珍しいとのことで、他の種の動物での仲間が死んだときの行動も気になったので調べてみたいです。

ジョクロに関する動画を見て

① ジョクロの動画を見て

チンパンジーにも人間と同じように死に関する意識があるかもしれないということについてとても面白いことだと感じた。また母のチンパンジーが子供の遺体をずっと運び続けたという行為については、人間とは全く違う行動をするという点でとても面白く感じた。また、軽い風邪のようなものでなくなってしまうというのは、横坂さんが言うておられたように免疫に関して先天性の問題や障害があったとしても、自然の中で生きることの厳しさを表しているように感じた。

② 疑問に思ったこと

なぜ子供の遺体をあんなにも長期間持ち運び続けるのかということについてはやはり不思議に思った。ずっと痛いそばにいてというので有ればまだ理解できるのだが、母チンパンジーは自分が移動する時にも子供の遺体を持ち運び続けており、持ち運ぶ様子や担ぎ上げる様子を見ていてもとても大変そうであるのに運び続けるというのは厳しい大自然の中ではとても非効率なように思えたからである。

次に群れのリーダーが死体を掴んで引きずりつつも枝と同じようにするのではなく、枝を引きずるよりは丁寧に行っているというのも気になった。人間と同じような死生観などに基づいて行動しているのかそれとも特に何も考えず本能的にそうしているのかは分からないが、人間と似たような行動をとっている点について面白く感じた。

③ 新しく知ったこと

母親は授乳期は生理周期が止まっているが、子供が死んだことで授乳期が終わり、また生理周期が再開して発情期に入るとするのは初めて聞いたことであり、とても驚いた。特に、授乳期は生理周期が止まっているというのは、考えてみればとても理にかなっており当然のことであるが、そのようなことは考えたことがなかったためとても意外だった。

またチンパンジーの遺体がミイラになっていくというのも意外であり、驚いた。エジプトのミイラは鼻から臓器や脳を抜き取り、遺体を乾燥させて作っていたと昔本で読んだことがあるが、自然環境の中でも遺体が乾燥してミイラになるというのはどのようにしてなったのだろうかと思った。

Jokro の動画を見て

最初にジョクロが倒れた時、側にいたチンパンジーが少し離れたように見えた。これは自然界では一度病気になると治りにくく死んでしまう可能性も高いからうつらないようにしたのだと思った。それでもジョクロの姉や母親のジレがジョクロを避けず気にかけていたことから血縁関係が濃いと、愛情が強いのだろうとも考えた。自然界のチンパンジーにおいての薬草利用について調べたところ、寄生虫の除去のためにある植物の葉を噛まずに食べているチンパンジーがいることが分かった。私の見た論文では、キク科のアスピリア属の植物などが取り上げられていた。この植物の摂取には性差があり、雌が雄の三倍多く摂るという研究結果もあるようだ。この差の理由に関しては、雌が自らの繁殖能力を調整するためにアスピリアを利用するのだろうと言われている。下痢止めや赤痢、胃炎、下剤、駆虫に効果のある多様な植物を利用していることも分かった。

ジョクロが、死ぬ前に本来できないはずの長時間のグルーミングをしていたことが印象に残っている。グルーミングは、ただ毛づくろいをして体をきれいにする目的だけでなく、場面によってケンカの後の仲直りや機嫌取り、きずなを深める、緊張を和らげるなど様々な意味を持つ。ジョクロはどのような意味でこのグルーミングを行ったのか知りたいと思った。群れの α オスのテュアがジョクロを引きずっていた時も、方向転換するときには右手から左手に持ち帰るような行動がみられ、枝のようなただのものとしてではなく扱っていたのが分かった。また、遺体のジョクロをずっと背中に乗せて運んでいたジレに仲間が近づいておいをかいでからも遺体を嫌がらずに普段通り生活していたことが、ジレに気を使っているのか仲間としてジョクロへの感情があるのか、すごく興味深いと思った。ジレが二か月間ジョクロを運び続けたこと、二か月という数字に意味があるのかも疑問に思ったが、栽培キットの話を聞いて、ジョクロへの愛情だと思っていた行動をどう捉えたらいいのか、印象が変わった。これを聞いて、ジレのジョクロの乗せ方が一時期変わったのは腐敗が進んでおいを放つ体を遠ざげるために足を上にしたのだろうかとも考えた。今回はまだ子供であるジョクロが亡くなって、ジレが背中に乗せて運び続けたが、運ぶことのできないような大人のチンパンジーが亡くなったときも死を惜しむような行動がみられるのかも調べてみたいと思う。

参考文献

https://www.jstage.jst.go.jp/article/psj1985/9/2/9_2_179/_pdf/-char/ja

野生チンパンジー薬草利用研究：成果と展望 マイケル・A・ハフマン 1993

<http://chimp-sanctuary.org/chimp/chimp-behavior> チンパンジーの生活

ビデオ 感想

この動画や動画に関する話を聞いて、チンパンジーがとる行動やどのような心情なのかなど、興味深い初めて知ることがたくさんありました。

ジョクロに鼻水の症状が出た時、本当に熱を測っているのかは分かりませんが、ジレが熱を測るように額に手を当てる動作が気になりました。それから少し日がたって、ジョクロは体が弱っている上に、普通幼いチンパンジーは毛づくろいはあまり上手ではなく短い時間でしかできないのに、ジレの体の毛づくろいを長い時間行っていたのはなぜか疑問に思いました。私はこのことを、体が弱っているジョクロは遊んだり激しく動いたりすることが不可能に近かったので、いつも愛情を注いでくれているお母さんにあまり激しく動かないでもしてあげられることとして毛づくろいをしたのかな、と考えました。その後、ジョクロが死んだあと、ジョクロが生きていた時のようにジレがジョクロの遺体を背中にのせ続けていたことに関して、ジョクロが息を引き取って二日後、ジレがジョクロをあおむけの状態で背中に乗せていたことが不思議に思いました。これには腐敗が関係しているのではないかという返答をいただき、私は腐敗のことは全く思いつかなく、新しいことを知ることができました。動物が死んでからミイラになるまでに肉や内臓が腐敗していくためその間は腐敗臭があり、その臭いで仲間がジョクロは死んだということは気づいていた、という話では、そのことが認識できるくらいははっきりした臭いがあり、良い臭いではないはずなのに、ジレがずっとジョクロを背中に乗せ、また仲間は嫌がるそぶりを見せなかったことは、もしジョクロをいたわっていたからなのだとしたら野生のなかである愛情は本当に大きなものなのだなと思いました。また、ナがジョクロの遺体を木の上から落としたり振り回したりしている様子は、私は遊んでいるというよりかは乱暴をしているほうに近いのではないかと感じていましたが、ナはこのような行動をすることでジョクロが活着ているように見立てているのではないかという考えにはなるほどと思いました。

動画の後の話の中では、アロマザリングのことや食料分配のことや死の概念のことなど、また、特に死体についたウジを食べるという話では発想が斬新でおもしろかったです。

本当にジレはジョクロへの愛情からこのように二か月間もの間骨になってもジョクロを背中に乗せ続けたのかは人によって意見が異なるとは思いますが、私はチンパンジーには心があると思っていますので、ジレの行動とジョクロへの愛情は関係が深いものだと考えました。野生動物の行動や心についてとても考えさせられました。

ビデオ感想

前回の実習で子チンパンジーの死と、仲間への影響についてのビデオを見て、色々思うことがあったので書いていこうと思います。

まず子チンパンジー、ジョクロが死んでしまうまでについてです。まず、ジョクロが風邪が原因で死んでしまったことに、野生の厳しさを改めて実感しました。そして、ジョクロが今まで衰弱しきってほとんど動かなかったにもかかわらず、死んでしまう数日前になって母親の毛繕いをしており、僕には母親に今までの感謝を伝えているに見えたので感動しました。他にも母チンパンジーがジョクロの額に手を当てて、人間で言うところの熱を測るようなジェスチャーをしていて、本当にその意図があったのかどうかわかりませんが非常に驚きました。

次にジョクロが死んでしまっただけについて、母親がずっとジョクロの死体を背中に乗せたり、生きていた頃とほとんど変わらない扱いをしていて、複雑な気持ちになりました。さらに他のチンパンジーの中でもジョクロの死を認識しているように見えるものもいれば、死体のジョクロと遊ぼうとしている子チンパンジーもいました。ジョクロが死んでいるかどうか認識できているか疑問に思っていました。学部生の先輩方が言うように子供は理解できていないが大人は理解しているのかなと考えました。

全体を通して、人間と同じように子供は死についてあまりよく理解できておらず、母親は我が子の死を受け入れられていないように見えたので、チンパンジーの仲間の死に対する反応と、人間の反応はほとんど変わらないのかなと思いました。

ジョクロの動画を見て

私は先日の実習での動画を見て、チンパンジーの「心」もヒトと似たようなものなのかもしれないと思いました。ジョクロの母親であるジレは、ジョクロが病気になっても普段と変わらない態度をとり、姉のほうがジョクロにかまっていたことが印象的でした。この時ジレは冷たい母親なのかと思っていましたが、もしかするとどうすればジョクロが元に戻るのか、今ジョクロに何が起きているのかが分からなくて戸惑っていたのではないかと思います。また、ジョクロが死亡してからの周りの反応が普段通りだったことにも気になりました。この実習を行う前に池田さん・文元さんの死生観グループで、動物園のチンパンジー4個体のうち、老齢のメスがなくなったという事例について話し合いました。その時の周りの反応は、死を確かめるように体をゆする、死者のそばに寄り添って離れない、わめき騒ぐといったものでした。この事例を知っていたため、ジョクロが死んだときの群れのメンバーの反応に違和感を覚えました。やはり戸惑っていたのではないかと考えられ、また先ほど紹介した事例にできた老齢の個体と違い、群れの他のメンバーとの交流が少なかったために悲しみが無かったのではないかと考えられます。

次に、ジョクロが死亡してからジレは長い期間死体を運び続けたとありましたが、この時「ハエを養殖して餌を確保する」いわゆるキノコ栽培キットとして活用しているのではないかと、という意見がありました。ですが、動画の中でジレがハエを追い払っているシーンがあったのでエサのために運んでいたわけではないと考えられます。ただ、ジレにとってハエが迷惑だっただけという可能性もあるため、動物の心理を読むのは難しいと感じました。他にも気になったところがあります。群れのトップであるアルファオスがジョクロの死体を引きずるという行為を行ったシーンです。このシーンの時ナレーターは「力を示すための行動に死体を使っている」と説明していましたが、私はそうは思いませんでした。普通のディスプレイであれば、音が鳴りやすいものをたたいて、力があることを示します。つまり、チンパンジーは音が出るものが分かるのではないかと考えました。もしこの考えが正しければ死体で音が出やすいと思うはずがなく、普段のディスプレイと同じ目的で死体を使うことは考えられません。そのため私は、アルファオスは「力を示すため」ではなく、「死んだことを教えるため」にこのような行動をとったのではないかと思います。

以上

ジョクロのビデオの感想

私は、チンパンジーはヒトに近い感性を持つ生き物だという先入観にとじこめられていました。

ですが、ある意見を聞いてその発想に驚かされました。

ジョクロの死体をキノコ栽培キットのように使っているのではないかというその意見は、もし正しければ死生観だのなんだの言っていられない話なので、詳しく考えてみたいとも思いました。

同じ大型類人猿であるゴリラのココは、死を『苦しみのない 穴へ さようなら』と表現したという話とは打って変わっての利益主義に頭がおかしくなりそうでした。

自分では思いつかないような種類の考えをもっとこれから得ていきたいです。

5月10日の実習では、ボツソウのチンパンジージョクロの死亡に伴う、周りのチンパンジーの観察事例を紹介するビデオを鑑賞した。

最初ジョクロの姿を見たとき、その顔付きに違和感を覚えた。健康なチンパンジーに比べて顔は白く、目は飛び出ていた。風邪を引いて衰弱していったとのことだったが、そもそも免疫が弱かったのではないかと思う。

ジョクロが死んだことを、果たして周りはどう捉えていたのだろうか。

死んでしまったか、生きてるけど動いてないだけかと思ったか。どのあたりから死んだと捉えていたか。まずは母ジレである。ジレは、ジョクロの死後2日目はジョクロを仰向けに、3日目は仰向けで頭を下にして運んでいた。体がガスで膨れ上がって、通常通りのうつぶせの状態では運べなかったのだろう、また口から発せられた異臭がきつかったために頭部を自分の顔の近くに持ってこれなかったのだろう、というのが今回のゼミで一致した見解だ。だからきっと違和感があった。もうジョクロは動かないものだと分かっていたと思う。でもジレはジョクロを背負い続けた。それはジョクロに対する執着故だったのか。または、同じ群れで過去に死んだ子どもを運び続ける母チンパンジーがいたらしいが、文化として習っていただけなのか。もしくは運んでいけばいつか生き返ると思ったからなのか。彼女の真意は分からない。

では周りのチンパンジーたちはどう思い、受け取っていたか。印象的だったのは、コドモオスのナーが、ほぼミイラと化したジョクロの死体を、木の上まで運んでは落とす、という遊びを繰り返していたことである。普通年下のチンパンジーが生きていて考えていたら、そんなことをするはずはない。だから死んでいたことは分かっている。でもなぜ落とす行為を繰り返したか。私は、そうして落下すればジョクロが動いてるように見えたからではないかと考えた。動いているように見えれば、生きてるように感じる。生き返って欲しいという思いがあつてのことか、生きてるように見えることが不思議で可笑しいのかは分からないが、考え方の一つとして唱えたい。

もう一つ。ジョクロの体に沸いたウジを取っているのを見た時、ジョクロの体をきれいにしようと思ってウジを取っているのか、それとも単純に食料としてウジを取っているのか疑問に思った。そこで「仮に、死体をシイタケの原木(キノコ栽培キット)のような気持ちで扱っていたらショックだね」と発言したところ、場の空気がざわついた。死体をかわいそうに思ってウジを取っていると考える人が大多数だったらしい。どれだけチンパンジーの気持ちに立って考えようとしても、無意識に人間の情を考え込んでしまう。自分の主観をできる限り排除して対象の気持ちを考えるのは本当に難しい。

このビデオの流れとしては、極力人間の感情で語りすぎないように作られていたと思う。女性ナレーターは淡泊に伝えることに努め、客観的事実だけを述べるようにしている。しかし一つの作品にしないといけないとなると、どうしても、見る側と共通する文脈の中で語らなければ、伝わらないし理解もされない。できる限り客観に寄せてバランスを保てた、良いビデオであったと思う。

大学院生も先生もいない状態で、どうやってビデオの感想を言うだけで進めていくのか心配だったが、高校生も大学生も着眼点が多く、また質問に答え得るだけの力を持っていたため、とても盛り上がる会となった。もちろん、ビデオの内容が、高校生 11 人と大学生 7 人が各自 3 点感想を言っても重複がほぼ生まれえないような、素晴らしい題材だったことも大きい。

このような熱い議論ができるメンバーなら、今年の実習も何とかなるだろう、と希望の持てた会であった。

5月10日の全体実習

農学部 板原 彰宏

今回の実習ではチンパンジーの死の認識について話し合ったわけであるが、チンパンジーについてのことは他の学部生や高校生に任せて自分はカラスについて書こうと思う。カラスは墓に集まったり、死体に群がったり、鳥葬であったり、羽が黒色であることもあって死と結び付けられることが多い。死んだカラスの周りに群がってカラスがカラスの葬式をしているという人もいる。確かに黒い鳥が群がってカーカーと鳴いている光景は不気味である。でも、カラスにはカラスなりの生活がある。そもそもカラスはスカベンジャーで死肉を食べる動物である。すべてのカラスではないが、カラスには一時的なものも含めて縄張りをもつ種がいる。他のカラスが自分の縄張りに入ってくると警戒や攻撃をするわけであるが、縄張り内に大きな餌場(ゴミ捨て場、死肉)がある場合、数羽で集まって死肉に群がる。というのも、1羽で他のカラスの縄張りに入ると蹴散らされるが、大勢いれば縄張りの持ち主ペアの2羽だけで蹴散らせないからである。皆でやれば怖くない効果といったところだろうか。他のスカベンジャーの鳥はどのように死肉に群がるのか自分は明るくないが、もしかしたらこれもカラスの賢さであったりするのだろうか。

日本ではカラスの死体を見る事はほとんどない。最近、車に轢かれたタヌキは時々見るが、車に轢かれたカラスは見たことない。生まれて1年目の冬に多くのカラスが死んでしまうと聞いたことがあるが、これまで冬に多くのカラスの死体を見ると思ったこともない。恐らくねぐらにしている山や森の中で死んでしまうか、朝早くカラスの死体を誰かが埋葬してくれているのだろうと思う。カラスが死ぬと、カラスが集まってくるようだ。死んだカラスがなぜ死んだのか、その原因を探しに来ているらしい。もし、その場に居合わせてしまったら、用心した方がいいかもしれない。一部のカラスはヒトの顔を区別でき、しかも長年覚えるうえ、集団内で情報が伝達されるという研究結果がある。つまり、もしカラスに危険人物と認定されればその地域一帯に住むカラスに危険人物認定されて、頻繁に警戒されるかもしれないからだ。悲しさや愛情を抱いているのかは分からないが死というのは重要な情報源だということをカラスは認識しているのだろうと思う。

5月10日レポート

京都大学 教育学部3回生

乾 真子

5月10日、第5回野生動物学初歩実習を行った。今回は、松沢先生の論文「Jokro : The death of a wild infant chimpanzee」を扱った。扱ったと言っても、高校生に英語論文を自力で読んで理解しろ、と言うのはさすがに無茶振りなので、あらかじめ論文に目を通してもらって、松沢先生に教えていただいた Jokro の論文内容の日本語字幕付きビデオをみた。その後、簡単に意見や感想の交流をしたが、予想していたよりもかなり議論が盛り上がり、1時間半以上も意見がとびかっていた。

感想だが、ビデオがとにかくおもしろかった。私は実習前に一度ビデオを見ていた。1回目にみたときは、Jokro の母 Jire が、Jokro の遺体の顔についたウジをとっているシーンをみて涙が出てきた。あまり物事に感動するタイプの人間ではないが、なぜだか心にジーンとくるものがあった。しかしながら、そのようなシーンについて、実習でビデオをみたあとのディスカッションで、「チンパンジーは雑食で虫を食べるのだったら、キノコ栽培キットのように Jokro の遺体を、ウジ虫を栽培するための道具にして虫を食べているのではないか」という意見が出てきて拍子抜けしたような気持ちになった。確かに、それで説明がつく場面もあったが、私は断じてそうではないと信じたい。死を理解しているかいないかは別として、子を思いやる母親の気持ちから出てきた行動だと信じたいと思う。

Jokro が亡くなる前の行動も印象に残った。食べることもできず、座ることができなくて横たえたりしているのに、亡くなる直前でも、母親にしっかりとしがみつ়く力が残っているのがすごいと思った。背中に乗っているといえど、移動する母親から落ちないためにはだいぶしっかりとしがみつ়く必要がある。動画をみても、手だけはしっかりと母親にしがみつ়いているのが確認できた。また、動画の冒頭で Jokro の顔をみたときから、死相がみえるなど思った。他のチンパンジーとも違って、顔が全体的に白くて弱々しい印象だった。「ああこの子これから死ぬのだろうか」と思った。あそこまで死相がはっきり見えるのも驚きだった。

今回は、高校生にとっても学部生にとっても頭を抱えて考える、今までにはあまりないとても楽しい時間だった。死について考えるのは難しいことであるが、おもしろい切り口がたくさん出てきたので、たまにはこのような少し難しめのテーマを扱うのも良いのではないかと思った。

5/10 野生動物学実習報告書

同志社大学文学部哲学科三回 文元 りさ

概要

コドモ個体のジョクロの死後における、母個体ジレとその他の群れに所属する個体の反応において特筆すべき点を挙げた。

・ジョクロが風邪のような症状を見せると、ジレが手をジョクロの額に当てるような行為を見せた。

→人間における心配、もしくは熱を測ると同意の行為なのではないかという意見が上がったが、これは偶然似た行為を起こしただけで、そのような意図はなかったと考える。

・ジョクロの死から二日、死体が腐敗をはじめ、ジレがジョクロを背負う向きを、頭を下に変える。

→腐敗が関係しているのか。ミイラ化を促進するため？

・アルファオスが、ジョクロの死体を持ち、枝と同じように引きずる行動をとった。

→枝に比べて扱いが定量であったことから、ジレに対するジョクロの死に対するアピールなのか。

・コドモ個体がジョクロの死体を木の上から何度も落とす遊びを、見せた。

→コドモ個体とオトナ個体では死体への認識が違う。

このほか、死の間際までジョクロがジレへの毛づくろいを熱心に行っていたことや、死体の腐敗が進み腹部膨れ、においがきつくなっても群れ全体として嫌なそぶりをみせず、ジョクロを背負ったジレを群れの中に置いていたことや、ジレがジョクロを守るように喧嘩をしている場所から離れている様子が見られた。

死体に対する反応は本能的なものが多いように見受けられたが、ジレの行動は明らかに異端であり、ほかの個体は動かないという事実を認識しているだけに見受けられるが、ジレには執着のようなものが存在しているように考えられた。それは多産の母個体故なのか、個体特有のものなのかが気になった。しかし、悼んでいるのかどうかまでは考察不可能であった。

<感想>

今回挙げられた議論の中で、私が特に興味深いなあと感じたのは、「Jokro の死に対する認識の仕方」についてです。動物の行動を見て、それを元に考察していくのが人間であり以上、人間から見た動物の気持ちの理解に、これほどにまでバラツキが出るのだと驚きました。具体的には、「Jokro の死をきちんとチンパンジー は認識していて、なかなか手放すことができないから、死んでからいつまで経っても母は Jokro の遺体を背負っているのんだ」と考える人もいれば、「いやいや、Jokro の遺体をしばらくの間背負っているのは、死への悲しみというよりも、遺体にわいてくる虫を食べるためなんだよ」と考える人もいました。チンパンジーから直接話を聞き出せるような魔法の道具がこの世に存在しない以上、我々人間はその行動の意図について推測することしかできない。たとえ、これまでの実験の結果から総合して、おおよその意図を知ることではできても、結局のところの本音を聞き出すことはできない、というようなことをおっしゃっていた、ある先生の話思い出しました。しかし、だからこそその面白さがある、それを痛感した全体実習となりました。

一つのことをあらゆる視点から考えてみる、これは、自然科学においても、社会科学においても大変重要なものの見方ではないでしょうか。学問の世界だけではないかもしれません。窮地に陥った際に、違った視点から問題を捉え、発想を転換することはあらゆる場面において重要だと思います。私の例で恐縮ですが、以前、決められた時間制限の中で、大勢の前で話をしなければならぬ機会があったときのことで、問題が発生したのはその準備段階でのこと。どうしても制限時間内に話が終わらなさそうなのです！そこで、発想を転換し、本当にこの場で伝えたいこと、それだけに絞って伝えたいほうが、むしろ良い発表になるのではないか、と考え、その通りにした結果、上手く制限時間内に話を終わらせることができました。一つのことをあらゆる視点から考えてみる、このことは人生を充実させます。思わぬ発見をすれば嬉しくなり、問題を解決できれば達成感に包まれます。高校生の皆さんも、ぜひ一度そういう体験をしてみてください。世界がキラキラと輝いて見えてくるはずです。今回の全体実習はそんなことを私に思い出させてくれる、素敵なものでした。

少し話が膨らみすぎたかもしれませんが、今回の、「jokro の死について考える」ことから「一つのことをあらゆる視点から考える素晴らしさに気づく」というように、野生動物の姿から、私たち人間のあり方を考える、という営みは、私にとってとても面白いことなので、今後の実習でもそのような視点で皆さんから学びを得させていただきたいと思いました。

野生動物学初歩実習 5/5、5/10 分レポート

池田智遥

ジョクロとジレの報告例については、1回生の前期に、人間以外の霊長類の死生観に興味を持ったときから、何度か読んでおり個別実習でも触れていた内容であったため他に実習に参加してくれている高校生にも考えてもらう機会ができて大変うれしく思いました。ただ、高校生達の感想を聞いたり、個別実習でのリアクションを受けて感じたことは、今回の実習は霊長類実習ではなく野生動物学実習であり、またコロナ渦で動物園に行けなかったこともあり、高校生全体がチンパンジーに強い興味を持っているわけではないということでした。それ故チンパンジーの基本的なことについてもあまり知らない高校生が多いと見受けられました。そのため、通常のチンパンジーが群れのなかでとる通常の行動についての知識が少ないので、ジョクロが亡くなったときのジレの行動がどのように特異であるかが分からない場合が多かったのかなと思います。この実習でビデオを見る前に、チンパンジーの社会がどのように形成されていて、チンパンジーとはどのような生き物なのかを知ってもらう機会をもうけたほうが良かったのかなと思いました。また、5/5の実習の際にも感じたことなのですが、必ずしも霊長類にだけ興味がある高校生ばかりではないので、自分も霊長類以外の動物たちへの知見を深めていかなければならないなと思いました。具体的には、京都市動物園にもいるゾウたちや、飯岡君が興味を持っているナマケモノなどの勉強をしていこうと思いました。5/10のビデオへの高校生達の感想について具体例を挙げていきたいと思います。まず、一番多いと感じた感想は、チンパンジーの世界には医者がないので風邪を引いただけで死んでしまうのだなというもの、ジレがジョクロの熱を額に手をあててはかっている様が、人間のように共感できたというものでした。一つ目の感想について、野生動物の命のはかなさを理解してくれたことは素晴らしいことだと思いました。それとともに、人間の命のはかなさにも触れてほしいと思いました。日本では確かに風邪を引いただけでは死にませんが、世界では風邪を引いただけで死んでしまうこともある人々がいる国がいくらかでも存在することを学んでいってほしいと思いました。二つ目のジレがジョクロの熱を額に手をあてて測っている様が人間のように共感できたという感想ですが、個人的には、そう見えただけで、ジレがジョクロの熱を測っていたとはいえないのではないかなと思いました。このように、チンパンジーのように人間と近い種であるからこそ、主観を交えながら観察することは危険でもあるということ、今回は理解してもらえればと思いました。個人的に、面白かった意見は、ジョクロの遺体にわいた蛆をチンパンジーたちが毛繕いでとった後、食べるのかというものでした。蛆をタンパク源として摂取しているのであれば、遺体運びにも合理的な理由がつくので、面白いと感じました。個人的には、頻繁に遺体運びが行われるわけでもないので、ただのタンパク源として遺体運びを行っているのではないと思いたいです。また、私個人のビデオへの感想として、一番興味深かった点は、やはり遺体への向き合い方一つでも、群れの個性、文化が出るなという所でした。この群れで

も、ジョクロの後にブアブアが遺体運びを行ったということもあり、今後彼女らの群れでこの文化が引き継がれていくのかは、非常に興味深い点であると思いました。また、腐敗への対応の仕方も興味深いと思いました。私は人間の腐敗臭を嗅いだことはありませんが、他の動物の腐敗臭は嗅いだことがあります。とても至近距離で我慢できる匂いではありませんでした。これは、腐敗した死体からの伝染病の流行リスクを考えれば、腐敗臭への忌避は妥当だと考えられます。チンパンジーと人間の鼻の構造や嗅覚細胞がどのように異なるかは分かりませんが、チンパンジーが、その腐敗臭を忌避する様子を見せないことが不思議でした。ここに、どのようなチンパンジーの意思が存在するのかは推測することしかできませんが、私は子を亡くした母への気遣いが垣間見えるのではないかと思えました。